

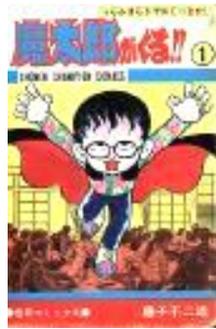
第十一回

フラボー山陰

わがらやすことがもてはやされる二十一世紀。よくわからぬものももてはやされるのが二十一世紀！「なんだかよくわからぬい...」そこ何かあるぞー」と察知するセンスがなければ、人間の精神は枯渇し人類は衰退する。なーんて、大風呂敷を広げてはじまる今年度の園長通信です。

先日の家族参観の折に開かれた、安来在住の児童文学者廣田衣世さんの講演会を、たくさん保護者さんが楽しみました。

彼女の不思議体験が講演内容のメインでしたが、多分廣田さんと園長は同じような世代で、小学生当時マンガの世界では「恐怖新聞」「魔太郎が来る」「エロエロアザラシ」、学校に行けば「じっけりえん」「キューピッ

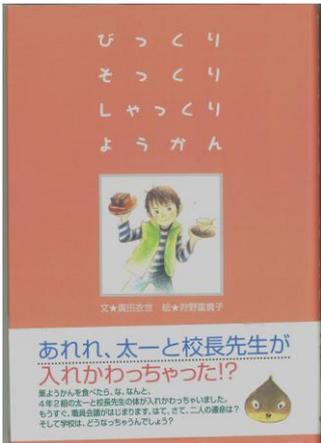


とわん「テレビをひければ UFO にエログラマー。そんな陽の当たらないところに棲息するもの、おどろおどろしいものが、少年少女を怖がらせながら、しっかりとした位置を占めていたように思います。妖怪ブームで境港に人が集まる。それは結構なことです、観光資源としての妖怪はブロンズ像といふ偶像になっても、ほとんどの妖怪の

宿のオチな陰はむしろ社会から駆

逐われて行っているのでは無いでしょうか。それが証拠に、とれだけ私どもは妖怪経験をしようとするのと同じです。

廣田さんの著書



廣田さんは幼少期、「神様は爪の先から入ってくる」と聞かされたこと。 「爪をきれていくなさい」と言わすし、そこをさせる。「見えなけど、おるよ」と聞いて育った子どもは、今や「不思議なことは不思議なこととして受けとめた方が楽しい」と言う大人になっています。

「大事なものは目に見えない」と言ったのは星の王子様、「見えないけれどあるんだよ」と言ったのは金子みすず、阿弥陀如来も「色もなつかたちもまします」と親鸞さんが言っように、目に見えないもので。

ただ、「目に見えない」ではとまらないのが求道者。目に見えないれば頼れない、それではおさまりがつかない。目に見えない光が言葉に結晶したという最深の不可思議が、浄土真宗という宗教の礎石であり、親鸞の根本経験と言えるところ。言葉が人を救う経験と言ってもいい。南無阿弥陀仏は呪文ではなく、永遠が言葉になった光の言葉なのです。これによって、私たちは永遠を聞くことができるし、となえのうがびれるようになったという、この上なくすくすくすることなのです。

それはさておき、陰こそが大事！「お陰さま」とは、はかりしれないながらも自分が支えているというセンスです。自分が意識できることがすべてではない。明日にわたっていることなんて小さなものだと思うと、目から、ほとんどの謙虚さが生まれてきます。

陰にまついふ言はまわりのものがある。山陰の時代だ！

(うたを聞きあげた六月二十七日の日本海新聞にまたま村上陽一郎氏が判らないものへの静かな畏敬を持つことも大切「判り易さだけに価値を置いてしまった時に忘れられるものをもっと一度書きとめておいた方がいい」と書きこいおられました。「参照せよ」)

